

荒戸城跡（既存看板の拠点）

荒戸城（あらとじょう）は、上杉景勝（うえすぎかげかつ）（1556～1623）と兄の景虎（かげとら）（1552～1579）が越後国（えちごのくに）領主であった父の後継者争いを行っている最中、景勝の命によって1578年に建てられたものである。

16世紀末に作られた城ではあるが、このような山城は、日本における大規模な要塞の中でも最も初期の形態であり、戦国時代（1467～1568）の大名が丘の頂上や開けた平野部に建てたさらに大規模な城の先駆けとなるものだった。後年に建てられるようになった城では地形の大幅な手直しが必要になることが多かったが、山城では巧みな工作をほとんど必要とせず、既存の地形をうまく活用していた。

ここから階段を上がったところにある道は、江戸（えど）（現在の東京）と日本海（にほんかい）を結ぶ主要道路であった旧三国（みくに）街道である。その街道を右に進むと城の正門へと続く道が始まり、敵を防ぐために作られた堀を通っていく。平らにならされた区画のうちで最初に通るのが二郭だ。城の建設中、ここの植生は土壌の侵食を防ぐ目的と防御壁にする目的で、手つかずのまま残されていたと考えられる。二郭と、堀の向かい側にある三郭との間には、井戸の跡が見られる。丘をさらに登った頂上には主郭があり、守る側はここで最後の抵抗を行ったものと考えられる。

城の建設に際しては、建設資材に利用する目的と銃の射線を確認する目的で、主郭周辺の斜面から木々が伐採された。また、主郭の北側一帯には土塁が築かれているほか、郭内の一角には、かつて物見やぐらが立っていた見晴らしのよい一段高くなっている場所がある。それぞれの郭は木製の矢来で囲まれており、そこに設けられた狭間と銃眼から、守る側は敵に向かって火縄銃を撃つことができるようになっていた。かつて街道は主郭からどの方向を見ても見えたが、伐採された木々が再び成長したため、現在では北側に湯沢（ゆざわ）を望むことができるのみである。